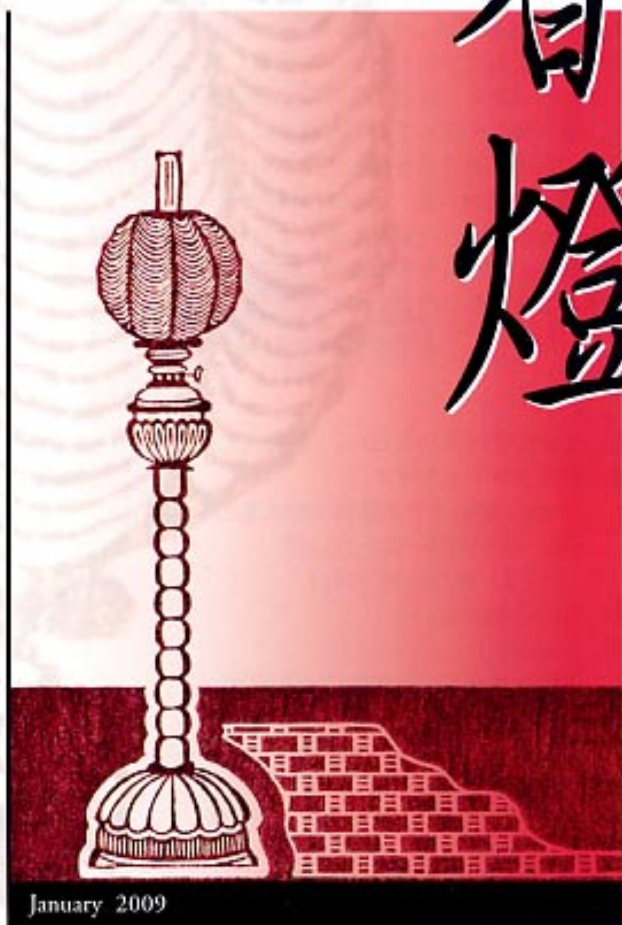


# 春燈



January 2009

1

# 成瀬櫻桃子の句

## ラマンチヤの男旅立つ杜若

現代俳句文庫19 『成瀬櫻桃子句集』 平成六年

『素心』以後に掲載されている句だから晩年に詠まれたものである。哀歓こもごもの人生を生きられた先生の作品にはいつも一抹の淋しさがつきまとうがこの句は明るい。太陽のように輝いている。颯爽としたドン・キホーテに御自分を重ね合せて「さあやるぞ」という御気分で詠われたのであろうか。リズムもいい。季語もよく効いて私の大好きな一句である。

さのれいこ

# 成瀬櫻桃子の句

## 鴛鴦の妻三従の水搔きにけり

「春燈」昭和六十二年四月号

三従とは父、夫、子に従うこと。これが女性の道とされた時代があった。いつも仲良く連れ立ち水面を優雅にすすむ鴛鴦も、滑らかな動きの下で夫に従うために必死に蹼を搔き、内助の功を守っているのかも知れない。

この句のころは安住敦先生に代つて選をされるようになって半年余り。主宰を支える重責を身をもって感じておられていたのではないだろうか。

小泉 三枝

主宰の句

安立公彦

あぢさゐのすがれをつつむ秋日かな

漣や秋日は千の輝きに

懐旧や穂芒に日矢ゆれ止まず

釈迦堂に惜秋の膝そろへ侍す

塔しばしつるべ落しを鎧ひけり



枯野道

渡邊泰子

石灯籠木の葉しぐれに灯りけり  
大き手にゆだねて白し冬薔薇  
つかずとも離れず歩む初しぐれ  
セーターにはづむ音符のペンダント  
冬麗の荒磯めぐるスリルかな  
荒磯打つ白波遠く小春富士  
ゆらめきつ夕日溶け入る冬の海  
磯の香の崖にしだるる冬紅葉  
かりそめの恋にたゆたふ浮寝鳥  
人はみな淋しきものよ枯木星

燈下集作家特別作品（抄）

## 秋気澄む

生方義紹

遠き日の飢の記憶や赤のまま

清秋や風紋の相読み解かむ

余韻引くアイ・ダ・トランペツト秋気澄む

爽やかや真水の如き峡の空

足半は男女兼用蝗とぶ

秋麗らノスタルジィのガラスペン

風の押すままに秋の蛾よろぼへり

雷同の雀とび立つ秋の風

木偶坊の威儀正しけり文化祭

得心を迫られてをり残る菊

# 当月集

安立 公彦選



○ 井上正子

銀座・松屋の畳紙の古び秋裕

秋茄子の謂れ知らずよ嫁二人

とどのつまり聖書にもどる秋思かな

銀杏散ると連れ立ちゆけりコンサート

飼主も犬も老いしや草もみぢ

○ 木内博一

野兎とぶや峠眼下に母郷の灯

稲架くぐりくぐり落穂を拾ふ母

豆叩き母在りし日も夕日浴び

アルプスヘタ日傾く豆叩き

噴煙を一日ながむ雁渡し

○ 吉川隆

靴を脱ぐ教会ばかり秋の潮（五島）

小鳥来る箱舟ほどの天主堂

うづたかき空ラのト口箱秋祭

結末を先読み灯火親しめり

靖国の叔父や従兄弟や菊白し

○ 久本久美子

秋雨の止みし樹々より栗鼠の群（滞米五旬）

肩触れてさはやかに詫ぶ五番街

対岸の摩天楼見る芒かな

秋日影ヨーコ・レノンの径に濃し

二日遅れの新聞届く小春かな

○ 三代川玲子

夕の星もひとつふやす菊畑

当番の子ら追ひまはす兎かな

冬かもめ見てゐる佃小橋かな

電車の灯とほりすぎゆく冬の川

朝寒や結びなほして靴の紐

# 春燈の句

安立 公彦選

秋の蟬影もろともに翔ちにけり

千葉 一ノ瀬次郎

芭蕉忌や少し熱めに茶をたてむ

月末はけんちん汁とよ樂しかれ

寒卵ひとりとなりて十年過ぐ

起きぬけの喉のささくれ神無月

芋の露少女は触れて地に戻す

冬耕の立止まりてはメール打つ

朴落葉ばさばさ鳴らす象の耳

薄紅葉せし桜木の鉢買はれ

日陰には日かげの匂ひ木の実落つ

空想の旅は自在や鳥渡る

休みぐせつきし噴水冬隣

東京 小林 リン

水仙の香に身を寄する安息日

京都 嶋村恵美子

雑踏に紛れてひとり雪催

朗々と僧の声明冬日和

木枯や遺影の亡夫とワイン酌む

芒の絮光りて飛ぶや舟溜り

葭原のささやき包む櫓音かな

逆光の葭の葉陰や小鳥過ぐ

月光の音なく晒す手こぎ舟

雨冷えや更けゆく居間の膝頭

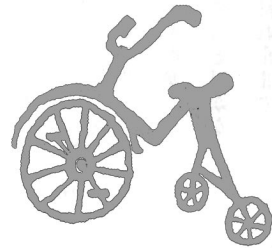
芒の穂さ揺らす風や吾も纏ふ

鳥声のしるき朝や実南天

身仕度を整へマネキン冬を待つ

千葉 永島 雅子

東京 後藤真由美





# 余言

安立公彦

室生寺の良夜の橋を渡るかな

宮崎 安江

俳句表現のなかで、固有名詞をどう扱うかと言うことは、俳句を作る人の常に考えるべきことである。その一つの範をこの句は示している。

女人高野とも言われるこの寺に立つ人は、室生寺という言葉に捕われる。結果、一句の中で室生寺という言葉のみ特出した句が出来るのが一般である。

この句に見られる中七下五の描写は、読み手をいまその場に立たせているような思いにさせる。「室生寺」が一句の中にみごとに所を得て「良夜」を活かしている。氏もまた春燈の先人のお一人。現在九十一歳と聞く。

手をのべて洗つてみたき秋の空

小宮 淳子

「秋の空」の透明感を「手をのべて洗つてみたき」という言葉で表現しているところが、今までの秋空の句と大きく異なる。秋の空が手の触れる近きにあるかのような、ありのままのこころの表意が、読むものの心を捉える。

こういう表現は意図して出来るものではない。日常の句ごころがある日秋空と結びついて、ふと口をついて出て来た「詩」である。

アルプスへ夕日傾く豆叩き

木内 博一

硯滴の水切れてゐる夜寒かな

中島 和昭

「春燈」の抒情と言つても内容は多岐に亘る。万太郎・敦・夕爾、晋・梨屋、真砂女・きくの・誠、また蟬之助・櫻桃子、和昭・閑山・愷作、啓二・榮子と挙げると、私達は実に勝れた作家を先人に持ったことを改めて思う。ここに記した人以外にも同列の俳人がいることは勿論のこと。そういう先人のお一人として、氏は「春燈」の抒情の基盤を築いて来た。敦じきあと結社の重鎮として、多くの門下を育て上げ、「春燈」の方向づけを為した俳人である。

氏は現在体調を崩されていると聞く。この句、ことさらに感情を述べることなく、事実を表現して、読む者のこころに深い思いを伝えている。春燈の抒情を今に伝える確かな作品の一つである。氏の本復を願うばかりだ。

作者は信州佐久の人。このアルプスは飛驒山脈、通称北アルプスと呼ばれる山なみだろう。最高峰は三一九〇メートルの穂高岳。槍・常念・穂高・乗鞍と続くこれらの山嶺に沈む夕日は定めし壯観と思う。その山々は作者の住む佐久の丁度西方に位置する。

この句は旅人の觀光俳句とは異なる。下五に置かれた「豆叩き」により、厳しい冬の到来を待つ間の農作業の営みが、暫しの安息の思いで描かれている。何よりも生活に密着した内容がいい。

〈噴煙を一日ながむ雁渡し〉は浅間山遠望の句だろう。作者の胸に揺曳する思いが伝わってくる。「雁渡し」にも歳時記の解説をとび出した実景描写の重みを感じられる。

秋夕焼円相ふかむ聖橋

篠原 幸子

「円相」は、まるい姿の意だが、同時に曼荼羅の諸尊の身を包む円輪とも称される奥の深い言葉である。聖橋はお茶の水を流れる神田川に架かる橋。近くに孔子を祀る聖堂があることから名付けられたという。

この句、「円相ふかむ」がいい。「聖橋」も単なる橋の名にとどまらず、聖堂に続くという思いに結びつく表わし方がみごとだ。

秋の日のさし込む木立一歩二歩

荘司 正代

この句は何よりも作者が今九十六歳であるという事実と併せて鑑賞すべきである。俳句はそういう作者の背景なしで味わうのが本来だ、という見方も勿論正論だ。しかし、何れの場合でも一句が真に鑑賞に値することこそ第一の要因である。

作者は今、秋の日のさし込む疎林を、一歩二歩と自分の歩みを確かめるようにして歩いている。それは同時に自分の生をその一歩ごとに反易していることでもある。その前向きな姿勢こそこの句の生命である。

長き夜を風土記の神と刻頒つ

池川みどり

この「風土記」は江戸時代に編まれたものでなく、「古風土記」と呼ばれるものだろう。出雲風土記、常陸風土記、などと共に、作者の住む地の「播磨風土記」もその一つだ。千三百年前に撰進されたとある。

風土記はその地の風土、産物、伝承などを記した「地誌」とも言うべき貴重な資料だ。当然その地の成り立ちを述べた伝承には、神も登場する。その神は神話に出てくる神だ。混沌の天地を切りひらき、人々に生活の場を与えてくれた神である。

壮大な物語の中に没頭する作者のこころ躍りが、「風土記の神と刻頒つ」に確かに読みとれる。